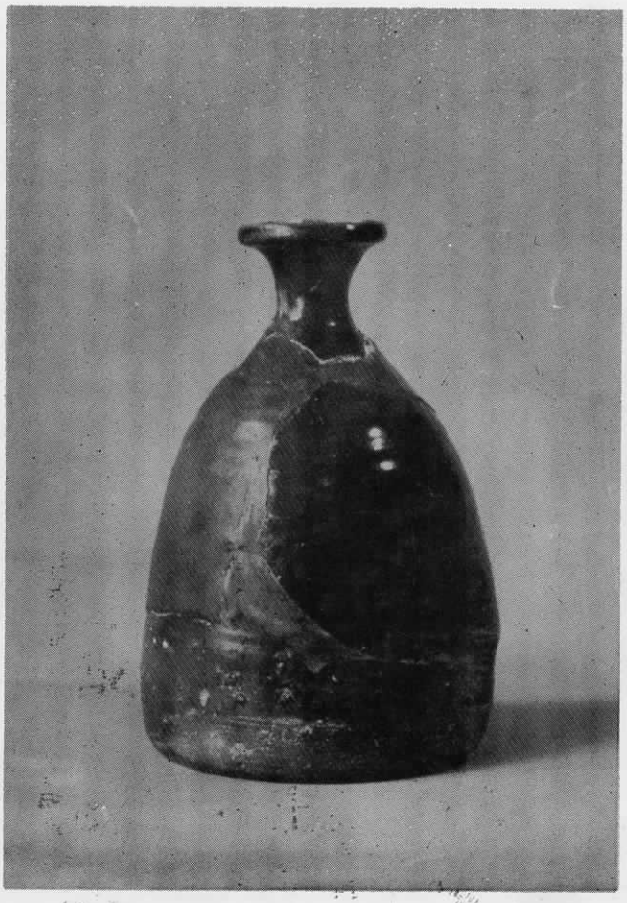
下切窯ヶ皿古窯

試堀調査報告書



船 徳 利

可児郡可児町教育委員会

1971,7,20

試掘調査員構成

試掘主体者	可児町教育委員会
試掘主任担当者	可児町文化財審議会副委員長 森川益三
試掘調査主任担当者	可児町文化財審議会委員 稲垣雄之助（奥磯栄麓）
試掘調査担当者	可児郡文化財会員 続木正
試掘調査員	可児町文化財審議会委員長 金子数雄 可児町文化財審議会委員 金子一郎　日比野義博 岡部基則　中島勝国 上野晃司　奥村智咲
試掘員	小川治　鈴木秀男 安江丑松　安江鑪 鈴木悟
協力者	藤田茂　鈴木秀男 植田建設
調査期日	昭和46年6月20日～26日
報告執筆者	稲垣雄之助（奥磯栄麓）

目　次

1. 下切窯ヶ皿古窯調査発掘について …… 3
2. 位　　置 …… 4
3. 下切窯ヶ皿古窯の概要 …… 5
4. 下切窯ヶ皿古窯遺物層の調査 …… 10
　1. ブルトーザーによる包含層破壊断面調査 …… 10
　2. トレンチによる調査 …… 10
5. 遺　　物 …… 14
　1. 窯道具其の他 …… 14
　2. 陶片分類 …… 15
　3. 陶片の評価 …… 20
　4. 陶　　土 …… 25
　5. 古　　銭 …… 25
6. 実　測　図 …… 27
7. 結　　び …… 29

1. 下切窯ケ皿古窯調査発掘について

昭和46年6月18日・可児町広見田白の鈴木秀男氏が大平に来訪、可児町下切窯ケ皿古窯が、大森住宅団地造成中ブルトーザーで破壊された、との報告を受く。ただちに現地に急行し其の破壊状態を視察した。

この地帯は大森住宅団地造成中で、下切窯ケ皿の破壊された地点は、7ｍ道路造成中に破壊されたものであることがわかった。高さ4ｍに達する斜面が造成され、其の断面にはおびたゞしいエンゴロが露出散乱して、窯の戸詰に使った焼土が窯の側壁のようにコチコチになって層をなし、焼土の下層には輪トチが積重っている。黒い土灰も薄く層をなしているところから、報告どおり、すでに窯は破壊されたのかも知れないと思われた。調査をしたが、窯の断片がわずかにあったのみで、結論を出す遺物はついに発見することは出来なかった。しかしこの儘にしておくと、道路造成の為に、残存せる物原は発掘不可能になる恐れが多分にあり、可児町教委と実地におもむいて検討の上緊急調査の必要ありと判断、たゞちに業者に窯跡地点の造成中止を申し入れた。破壊された地点の西南側は昭和の初め、多治見工業高校教諭・高木氏が発掘した竹藪があり、物原にはエンゴローや陶器の小片が散乱していて、層も薄くかなり乱掘、盗掘の跡が明瞭である。ブルトーザーで破壊された地点は、土地の人の話では明治頃に畑地造成の為上の山を削って「物原」に埋土をしたそうで、物原の面積は不明で、窯の所在も不明である。したがって、残存物原の探索がこの調査の目的ではないかと思われた。可児町文化財委員会及び可児町教育委員会は緊急試掘調査をすることに決し、県当局の了解を得て6月20日から6日間の予定でトレンチを入れて緊急調査をすることになり、発掘担当責任者としては、町文化財審議副委員長・森川益三、　町文化財審議委員・稲垣雄之助（奥磯栄麓）、可児町文化財会員・続木正の三名が決定した。　試掘調査担当者三名は、目的について審議したが、①団地造成のための7ｍ道路造成によって、傾斜面に埋没される遺物の発掘。　②残存せる物原の面積のトレンチによる調査。　③窯の調査。④焼成年代の調査。　以上の4項目を目的とする緊急試掘調査とすることに決定した。

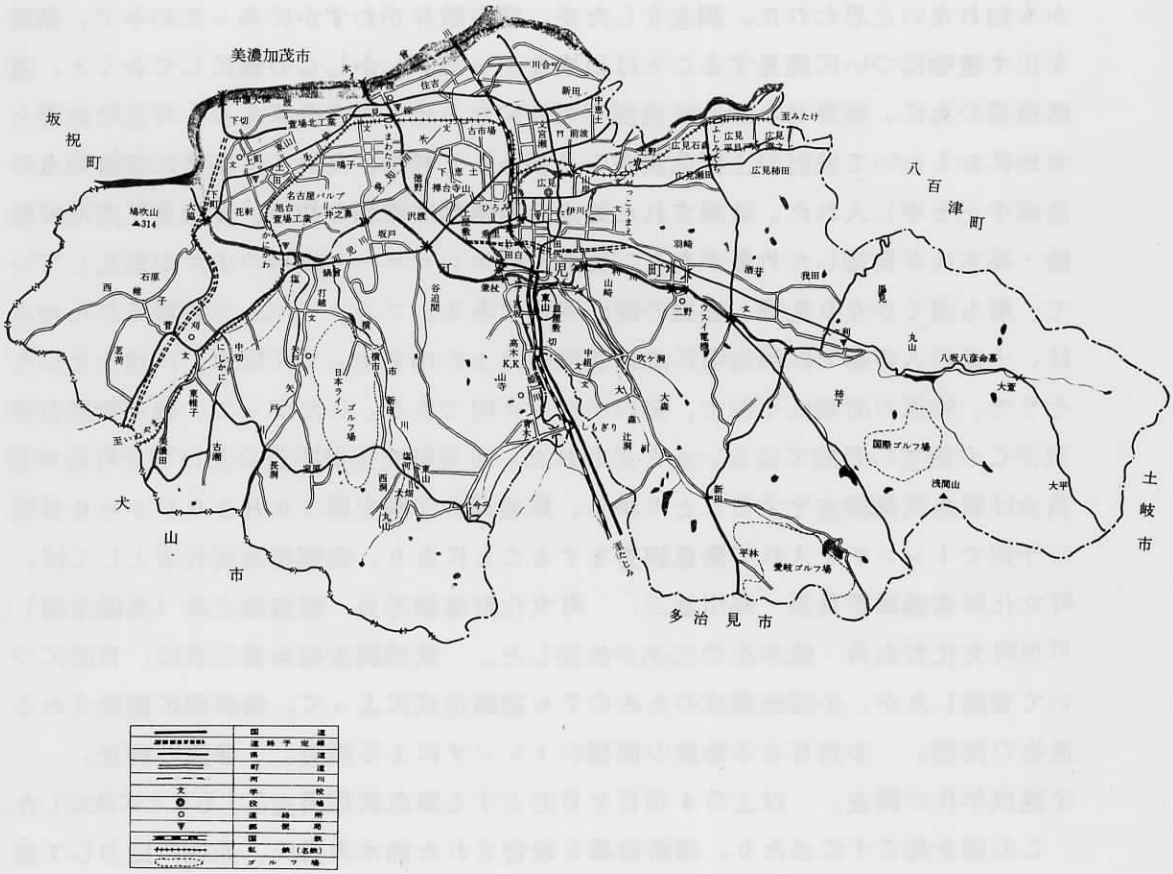
この稿を起こすに当たり、窯跡破壊を報告された鈴木秀男氏、発掘に協力して戴いた地主の藤田茂氏、大森団地造成中発掘に協力された植田建設に対して厚く感謝の意を表したい。

2. 位　　置

下切窯ケ皿古窯は可児町下切8反田2731～4の693㎡が其の所在地である。濃尾平野の北東に位置する可児郡可児町は、木曾川と多治見市、土岐市の丘陵地帯にはさまれた平担部の多い地形であるが、可児町の東端に位置する久々利の丘陵地帯には、土岐市に連なる秀れた桃山陶古窯群が有る。久々利の丘陵は帯状の二野・羽崎の

可児町図

（S＝1：50,000）



平担部と並行するように、帯状の大森盆地を抱くようにして西へ姫迄伸び、その先端は東山といい可児町広見田白の境迄達しているが、可児町大森・田白との境の丘陵にあるのが、下切の窯・通称　下切窯ケ皿古窯である。下切窯ケ皿古窯の西から多治見の南へ向う丘陵地帯には、平安灰陶、山つき小つきの窯が無数にあり、下切窯の位置は、西に平安、鎌倉前期、延喜式時代の古窯群と東に桃山古窯群に狭まれた通称サバ山（水成岩）地帯に築窯された窯である。可児町広見駅から約1.5㎞の地点に位置し、久々利の志野の名窯大萱からは、約西へ7㎞の地点に位置している。

3. 下切窯ケ皿古窯の概要

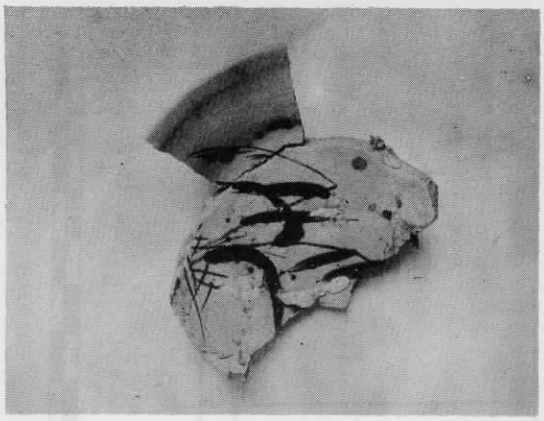
下切窯ケ皿古窯は、国道２４８号線の東に位置し、なだらかな丘陵にあり、　国道から東へ４００～６００㎡に物原包含層があると推定されるのであるが、物原の広さは埋土されていて正確にはまったく不明である。登窯の存在したはずの傾斜地も不明であり、物原の東にあったように思われるが、明治時代　畑地造成の為に山を削って窯床を埋めたのではないかと思はれる。物原の北に山があったがブルトーザによって、物原の一部と共に削り取られてしまったので、窯の所在を調査することは最早不可能となった。したがって窯を調査する残された地点は、物原の北３ｍから１０ｍの畑地でトレンチを入れる以外には無い。物原の西部は竹藪になっていて、　昭和初期に発掘され、陶片の残片が出土するのみで、深さも深い場所で６、７０㎝、浅い場所では３０㎝位いである。地山は通称サバ山及び黒土で遺物は少ない。ここからは窯ケ皿古窯の代表的な陶片が出土している。この窯の本格調査をする地点としては、物原埋没地の畑地が有力であり、ブルトーザーによって其の断面が露出しているので、今回の緊急調査は畑地物原埋没地の斜面より東の遺物層を対象とした。

ブルトーザーによって削り取られた断面には東西約９ｍ程物原が確認され、表土から５０㎝程度が埋土で、其の下層は最も深い地点で１ｍ５０㎝、遺物層は「焼土」「輪トチ」「円護籠」からなり、陶片は少ない。表土より１ｍ以下から御深井焼が多量に出土し、織部焼は平均１ｍ５０㎝以下の層から出土する。寛永通宝が１ｍ３０㎝の地点から出土したが、御深井焼と織部焼が混ざって出土するところから判

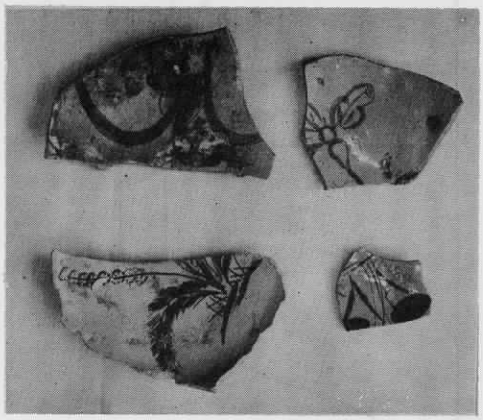
断して、織部焼が寛永頃迄焼成されていた貴重な証拠である。この地点の織部焼が他の地点より浅く出土したのは、地山が高いからであった。ブルトーザー断面の物原からは、窯の破壊された断面が4・5個出土し、窯の　口にあったと思われる灰の溶解凝結したものを出土している。窯の戸詰めに使用した焼土もありこの様な窯グソは、普通当時にあっては、窯から谷へ捨てたものであるが、しかし窯の所在が不明で下切窯の場合には結論が出ない、「輪トチ」も大量に分厚な層となって出土しているので、窯は近くにあったはづである。

円護籠の形式は丸底と底一文字の二種類だが、空気穴もあって新しい感じのエンゴローである。窯印なるものは一つも無いのが特徴であった。天正慶長期の美濃窯の多くには窯印が有る。窯印は瀬戸物屋のマークと云う説が強いが、天正慶長期の頃は信長以来の「楽市」「楽座」でいわゆる今日のような「自由経済」の時代であり、どこの商人でも、美濃の焼物は自由に買えたので、品物は注文主に応じてエンゴローに迄マークを入れたと思われるが、江戸時代に入ると、尾州家の御用窯、瀬戸焼、美濃何々窯、御蔵元、御蔵会所とか云われるようになって、商人も名古屋の商人以外は禁ぜられていくので、そうした成行になったはしりとして江戸初期、元和、寛永期の姫窯には窯印が無いのかも知れない。　姫窯の調査は江戸時代初期の窯としての、窯の特徴を知ることが出来たが、特に作品の薄作が目立った、天正慶長期　古田織部正重然の指導下にあった美濃窯の作は分厚で豪快であったが、姫窯は岡田将監の御用窯ではないかと云う説のように、織部の指導は考えられない作が多い。慶長１８年大久保石見守長安の後を受けた美濃奉行岡田将監は、小掘遠州とは後に縁戚関係にあった。即ち子将監の室は遠州の孫娘であったので、そうした関係もあってか、姫窯は遠州好みと思われる薄作や素直な茶陶が目立った。

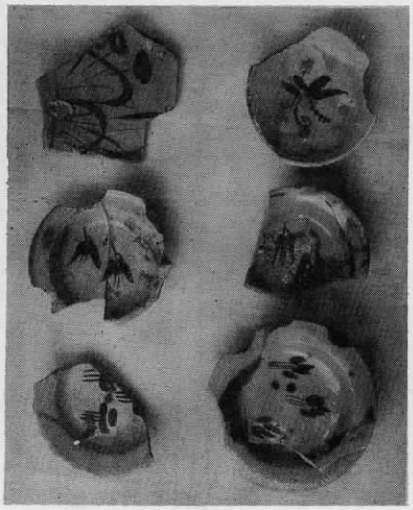
姫窯から約５００ｍ離れた西に岡田将監の役宅があり、役宅には織部瓦を葺いたと云うが、姫窯には白織部瓦の断片が出土する。多治見市小名田窯ヶ根窯も姫窯とだいたい同時代の窯で、この窯の白織部瓦は分厚であるが、姫窯のものは薄作で、数奇屋に使用した瓦のようである。織部焼末期の状態を知るための存在として姫窯は貴重な窯であった。



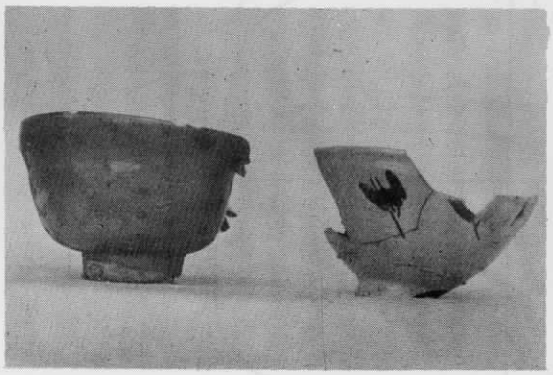
織　部　鉢



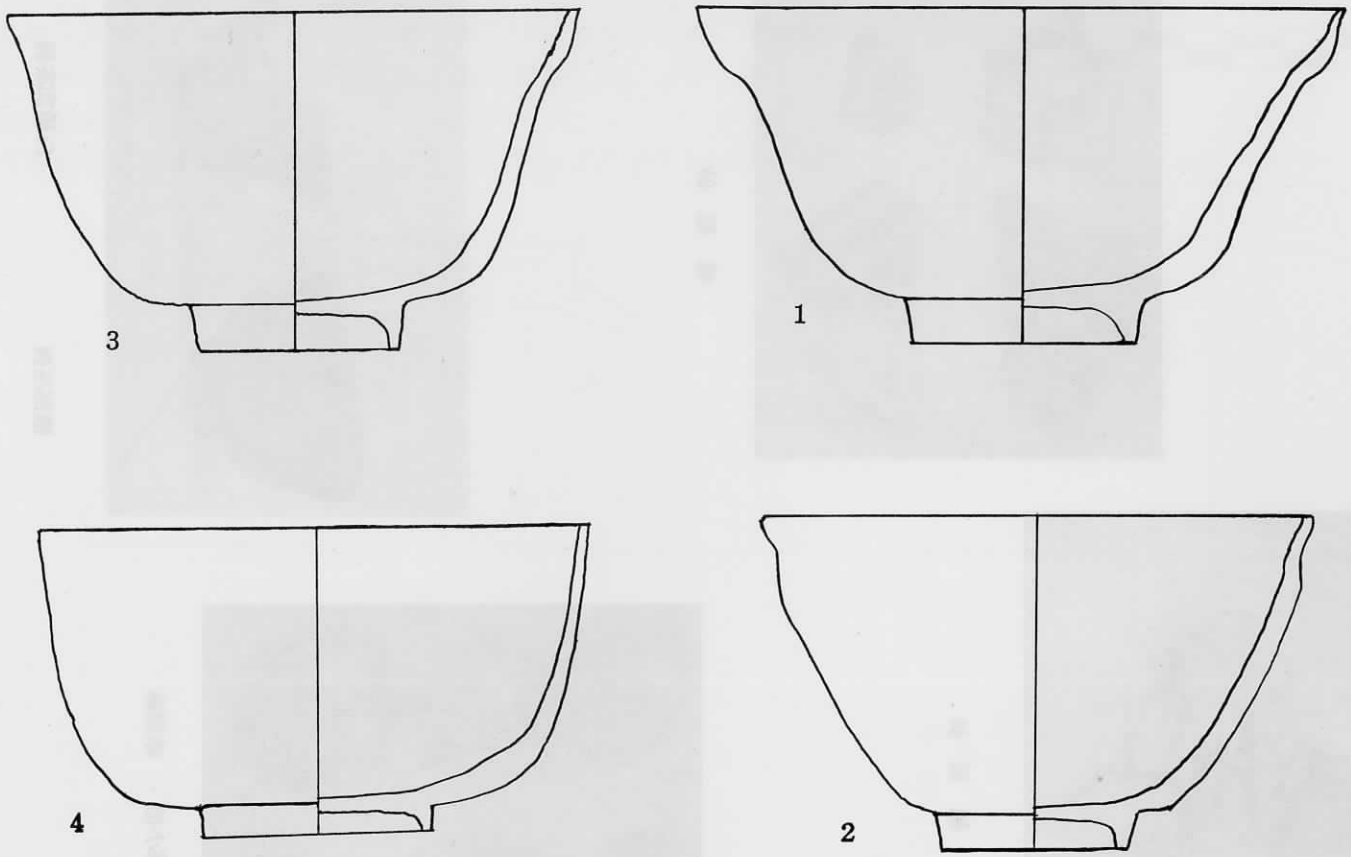
織　部　鉢

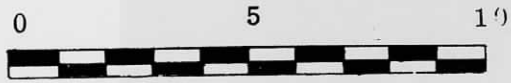


織部　　白織部小皿　　織部鉢

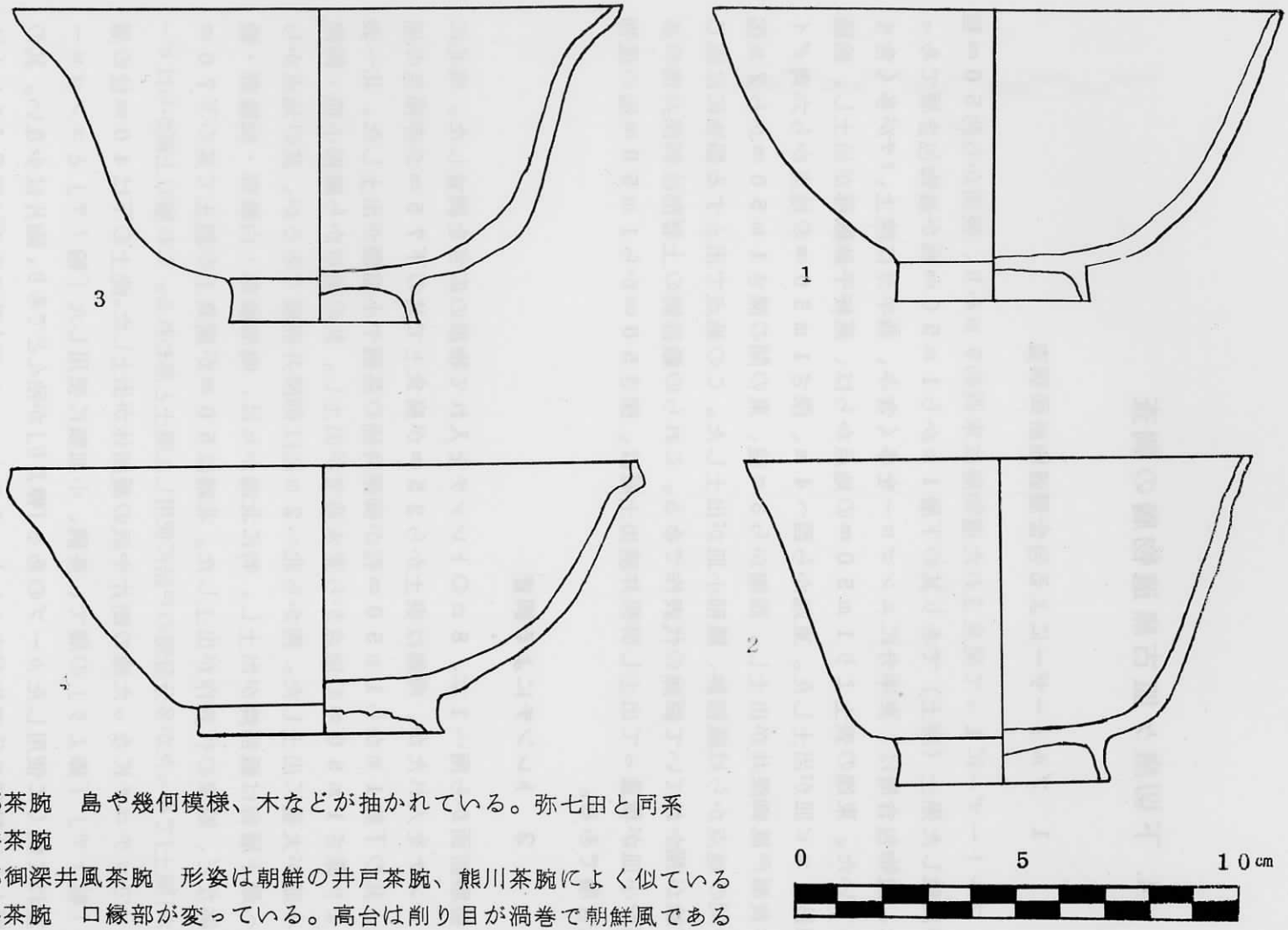


織部茶碗　　白織部茶碗





1. 織部茶腕　縁紬たらしがけで絵はないが姫窯代表作の一つ
2. 天目茶腕
3. 天目紬灰たらしがけゴロ八茶腕、弥七田に同じ茶腕が出土する
4. 飴紬ゴロ八茶腕、大平、尾呂に出土



1. 白織部茶腕　島や幾何模様、木などが抽かれている。弥七田と同系
2. 御深井茶腕
3. 白織部御深井風茶腕　形姿は朝鮮の井戸茶腕、熊川茶腕によく似ている
4. 御深井茶腕　口縁部が変っている。高台は削り目が渦巻で朝鮮風である

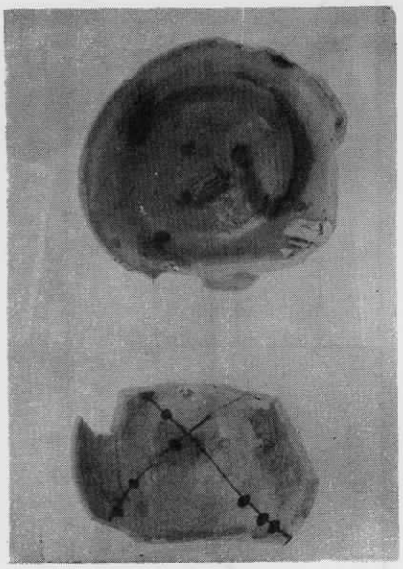
4. 下切窯ケ皿古窯遺物層の調査

1　ブルトーザーによる包含層破壊断面調査

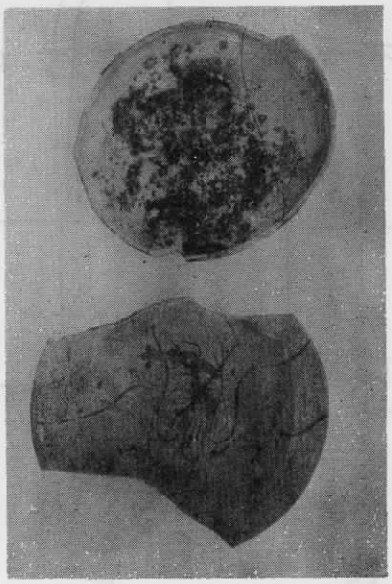
ブルトーザーによって発見された遺物層は東西約９ｍあり、表面から約５０㎝程が腐蝕した黒土（埋土）であり其の下層１ｍから１ｍ５０㎝程が遺物包含層であった。遺物包含層は、東半分にエンゴローを多く含み、西半分は焼土、トチが多く含まれていた。東端の表土より１ｍ５０㎝の地点からは、高杯平鉢織部が出土し、絵織部鉢、エビ皿が出土した。東端から西へ４ｍ、深さ１ｍ３０㎝の地点から六角グイ呑黄瀬戸風御深井が出土し、西端から３ｍ程、東の間の深さ１ｍ５０㎝から２ｍ迄の間の地点からは織部鉢、織部小皿が出土した。この地点で出土する器物には総じて絵が描かれていて姫窯の代表作である。これらの織部焼の上層部は御深井焼の茶碗や小皿が積重って出土し御深井焼出土層は、深さ５０㎝から１ｍ５０㎝迄の遺物包含層である。

2　トレンチによる調査

破壊断面から南へ１本、８ｍのトレンチを入れて物原の広さを調査した。南北にトレンチを入れたが、南端は表土から２５㎝が腐食土で其の下７５㎝が赤褐色の埋土、其の下約１ｍから１ｍ５０㎝程が御深井焼の茶碗や小皿類が出土した。北へ表土より深さ１ｍ５０㎝の地点から寛永通宝が出土し、其の地点から織部小皿・御深井小皿が大量に出土した。南から北へ２ｍ迄は御深井焼層であるが、其の地点から北へ最下層部は織部焼が出土し、特に北端からは、鳴海織部・白織部・絵織部・織部鉢など、姫窯の代表作が出土した。北端は５０㎝が腐食土の埋土で其の下７０㎝程が「焼土」であったが多分登窯の戸詰に使用した焼土と思われる。この層の上部からはビードロでコチコチになった窯の断片や灰の凝結体が出土した。焼土の下は４０㎝位の層が「輪トチ」「捧より」の層で、茶碗、小皿類に使用した「輪トチ」とエンゴローを重ねて焼くに使用したカーブのある「棒より」が殆んどであり、陶片は少ない。其の下層からは織部の代表作が出土した。このトレンチでは遂に窯床は発見することは出来なかった。　南端の遺物の出土状態から推察して、トレンチの南の埋立地には、かなり物原が埋没されていることが立証され、　姫窯の全容の把握は出来ないま

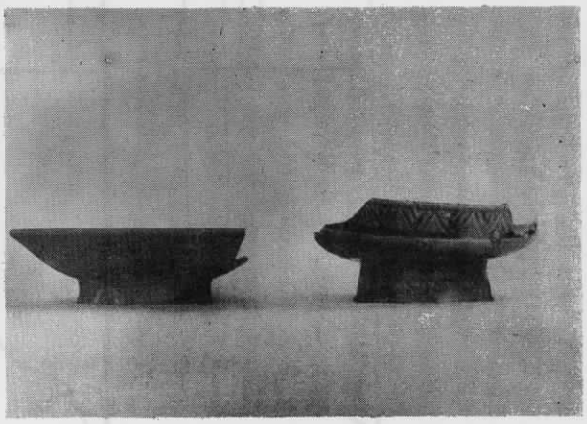


織部茶腕
白織部茶腕

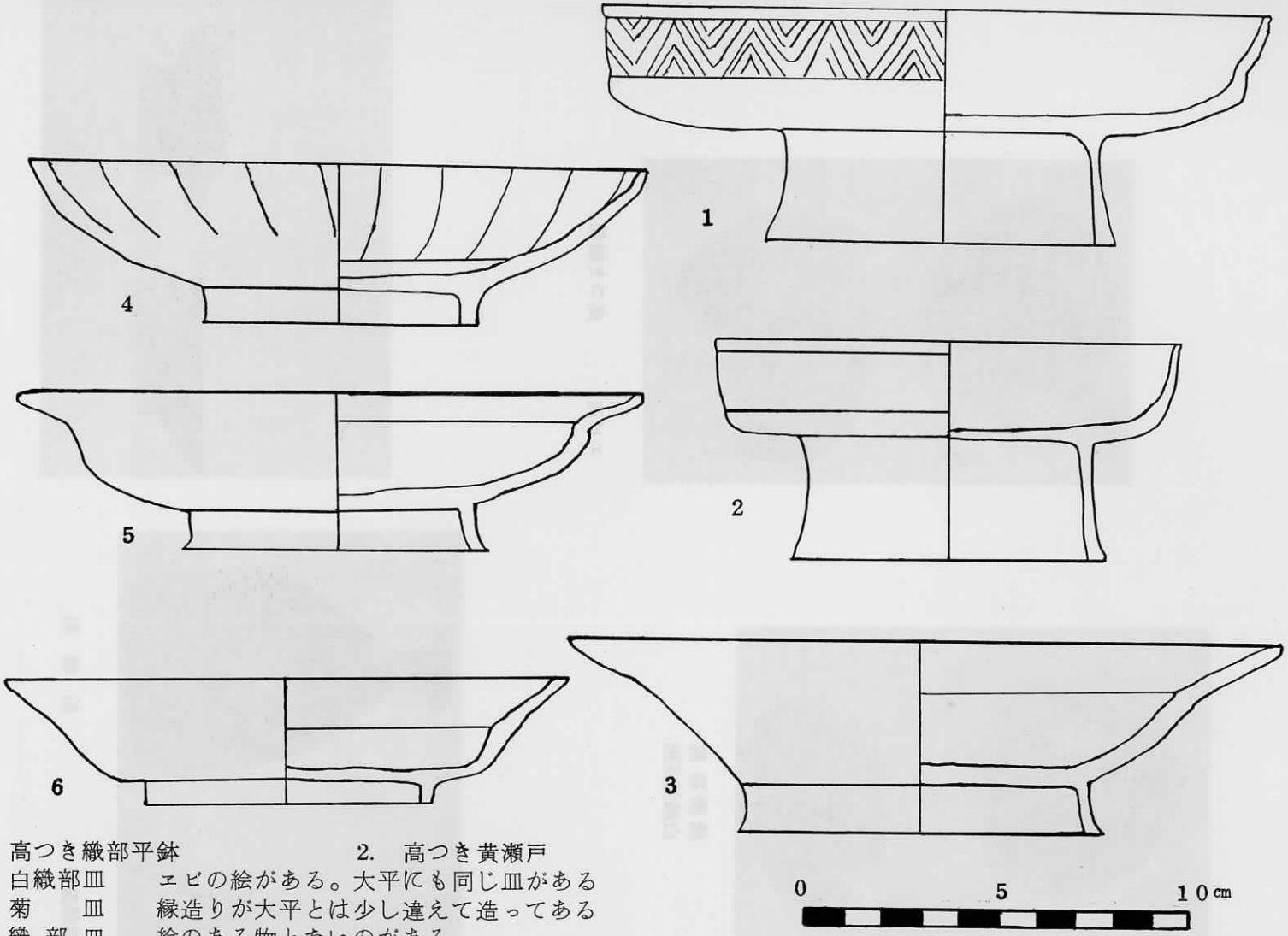


エビ皿　　高つき織部

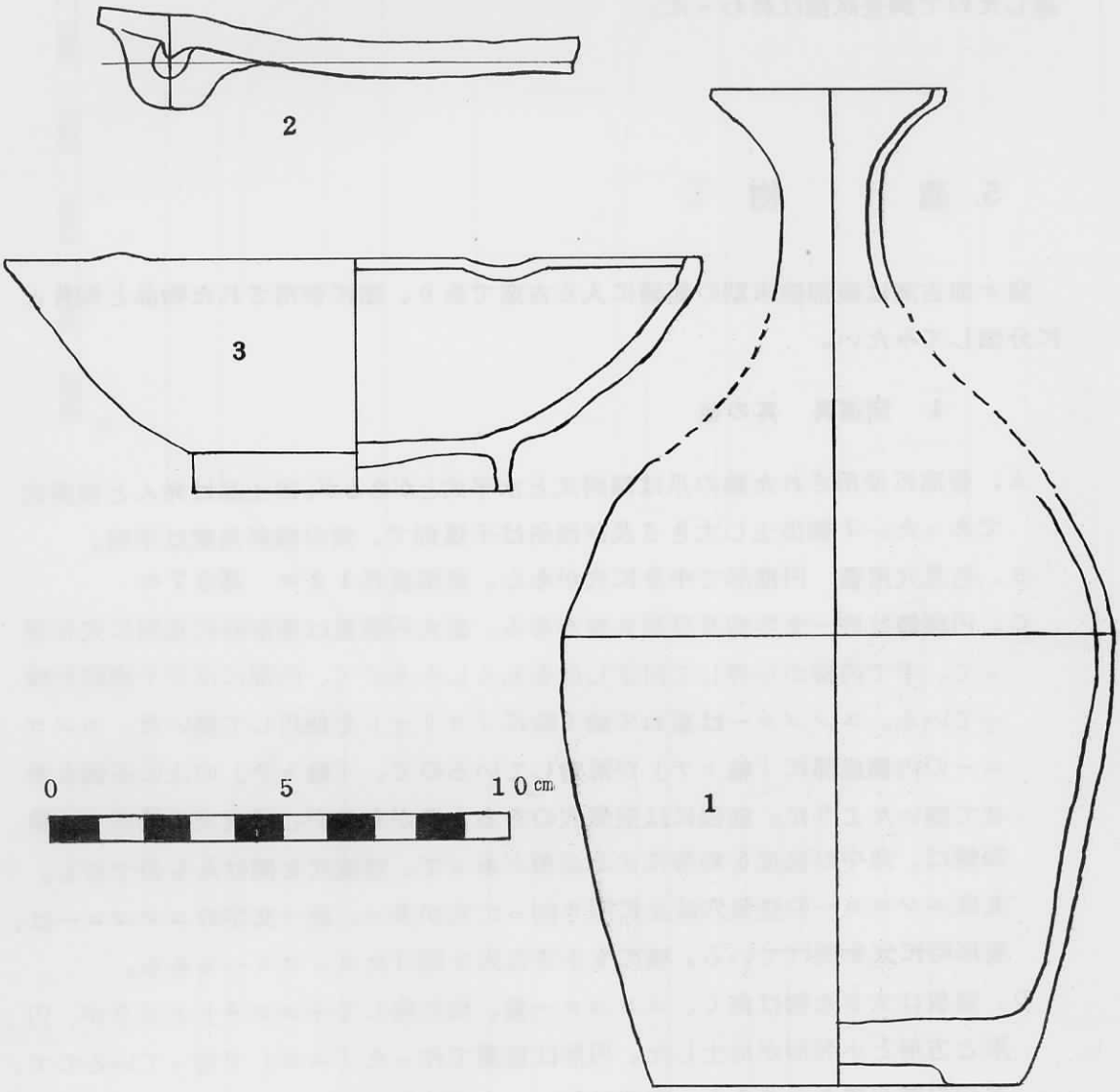
織部振出　　船徳利



エビ皿　　高つき織部



1. 高つき織部平鉢　　2. 高つき黄瀬戸
3. 白織部皿　　エビの絵がある。大平にも同じ皿がある
4. 菊　　皿　　縁造りが大平とは少し違えて造ってある
5. 織 部 皿　　絵のある物とないのがある
6. 織 部 皿　　絵のある物とないのがある



1. 織部徳利　竹の葉が抽かれている
2. 織部足附鉢　弥七田風の絵が抽かれている
3. 鳴海織部　梅・竹などの絵が抽かれている

でも、このトレンチによって、かなりの参考出土品約５００点があり、今回の緊急調査試掘の目的とする四項目のうちで窯の確認は次回にゆずるとして、他の目的は達したので調査試掘は終わった。

5. 遺　　物

窯ケ皿古窯は織部焼末期の範鋳に入る古窯であり、窯に使用された物品と陶片とに分類してみたい。

1　窯道具　其の他

A．登窯に使用された駒の爪は傾斜式と水平式とがあるが、出土品は殆んど傾斜式であった。7個出土し大きさ及び傾斜は不規則で、窯の傾斜角度は不明。

B．色見穴用蓋　円推形で中身に穴がある。底部直径１２㎝　高さ７㎝

C．円護籠は底一文字型及び底丸型がある。底丸円護籠は整形時に地面に穴を掘って、手で内部から押して凹まし底を丸くしたもので、内部には手や指跡が残っている。エンゴローは重ねて焼く時に「ヨリ土」を使用して焼いた。エンゴローの内側底部に「輪トチ」が附着しているので、「輪トチ」の上に茶碗を乗せて焼いたようだ。底部には空気穴のあるものがあるが、酸火炎で焼成する織部焼は、窯中の温度を均等にする必要があって、空気穴を開けたものである。丸底エンゴローの空気穴は主に叩き割った穴が多い。底一文字のエンゴローは、整形時に穴を開けている。横にも小さな穴を開けたエンゴローもある。

D．窯板は大きな物は無く、エンゴロー蓋、俗に略して「エブタ」と云うが、円形と方形と小判形が出土した。円形は稲藁で作った「ニゴ」で切っているので、糸切の跡が鮮やかである。窯印は無い。方形は四角に削って造った蓋であるが、方護籠は出土していない。小判形は、大萱、大平、高根などの穴窯の物とまったく同じである。

小判形……　縦２２㎝　　横１０㎝　　厚さ１㎝５

円　形……直径１６㎝　　厚さ１㎝５

方　形……直径１７㎝１４　　厚さ２㎝

2 陶 片 分 類

陶片器物の種類は豊富であり大別すると、下の如くである。

A．鉢　B．高つき　C．茶入　D．皿　E．徳利　F．グイ呑
G．マドロスパイプ　H．汁注　I．茶碗　J．振出　K．足附鉢
L．白織部瓦　M．線香鉢　N．御歯黒わかし

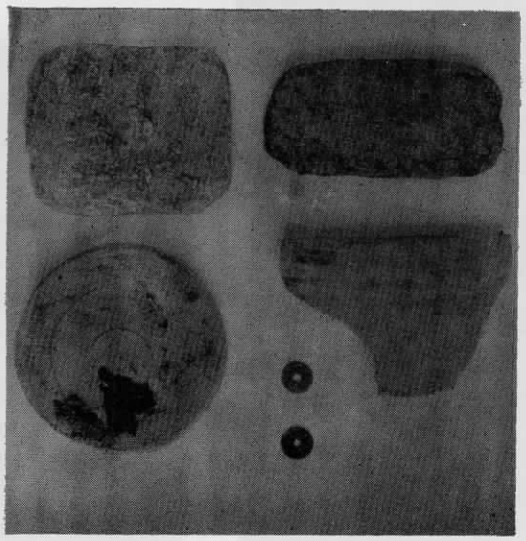
△ 釉薬分類大別

A．織 部　B．白織部　C．鳴海織部　D．古瀬戸天目釉　E．飴釉
F．御深井

△ 図　　柄

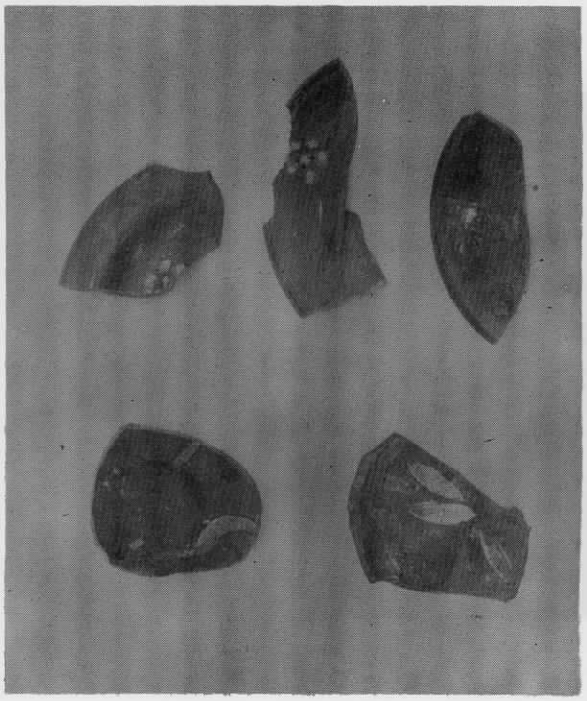
草花、木、鳥、幾何模様、線、線刻

図柄は桃山陶の絵を其の儘踏襲しているので、一見桃山陶と同じである。姫窯の特徴が出ているので、なかなかの佳品も焼けている。



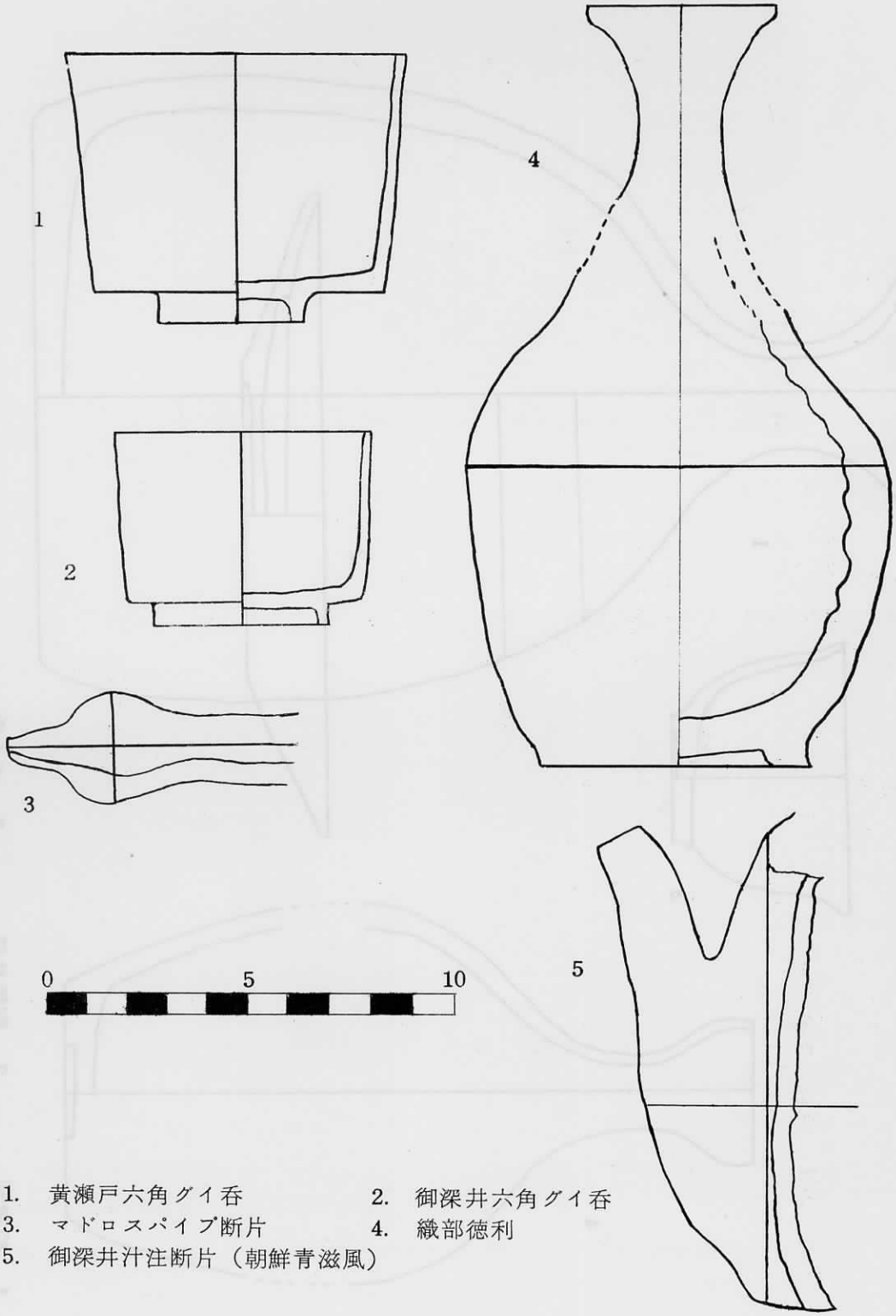
織部瓦　古銭　ヱ蓋

エンゴロ　より　駒爪

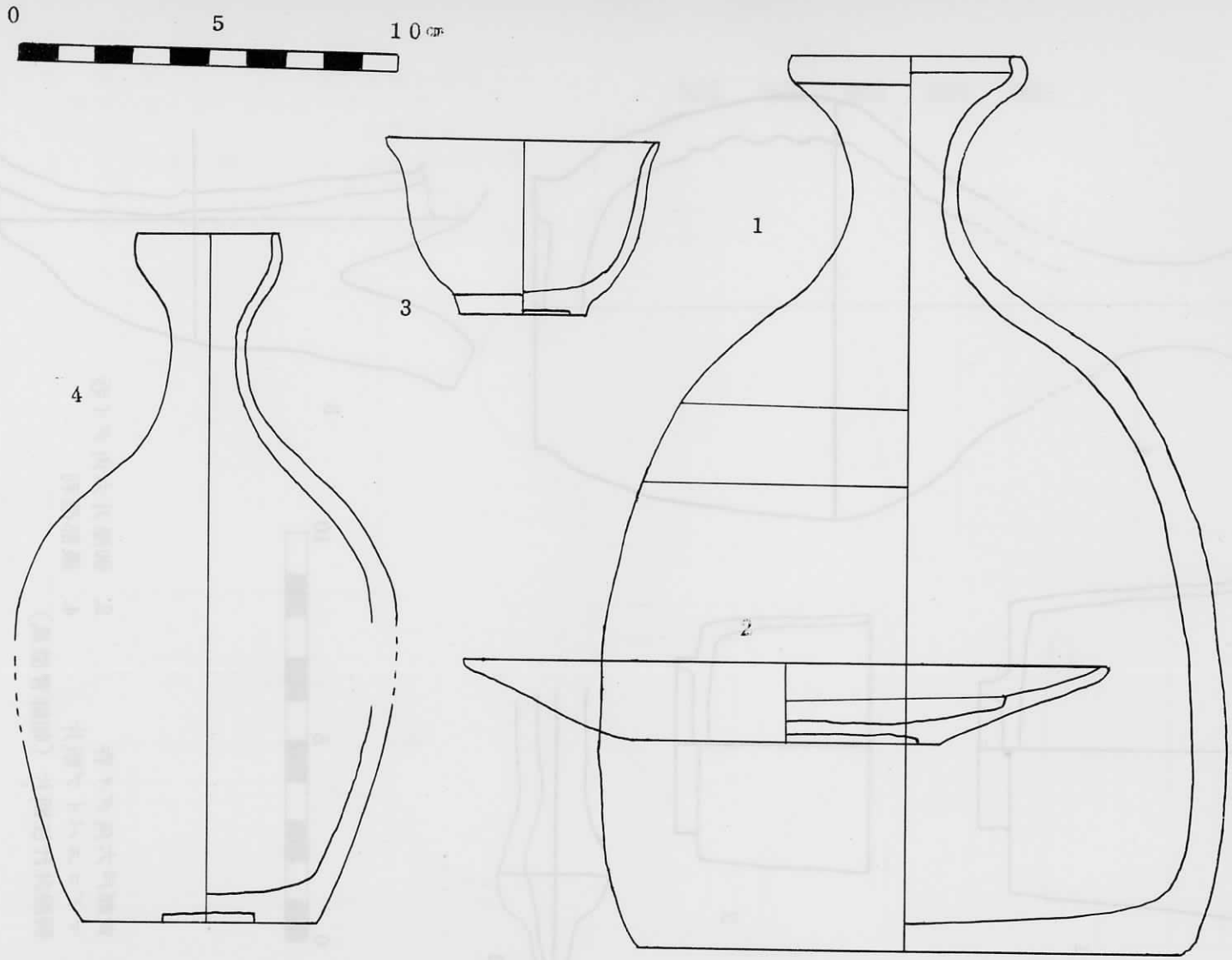


鳴海織部小皿

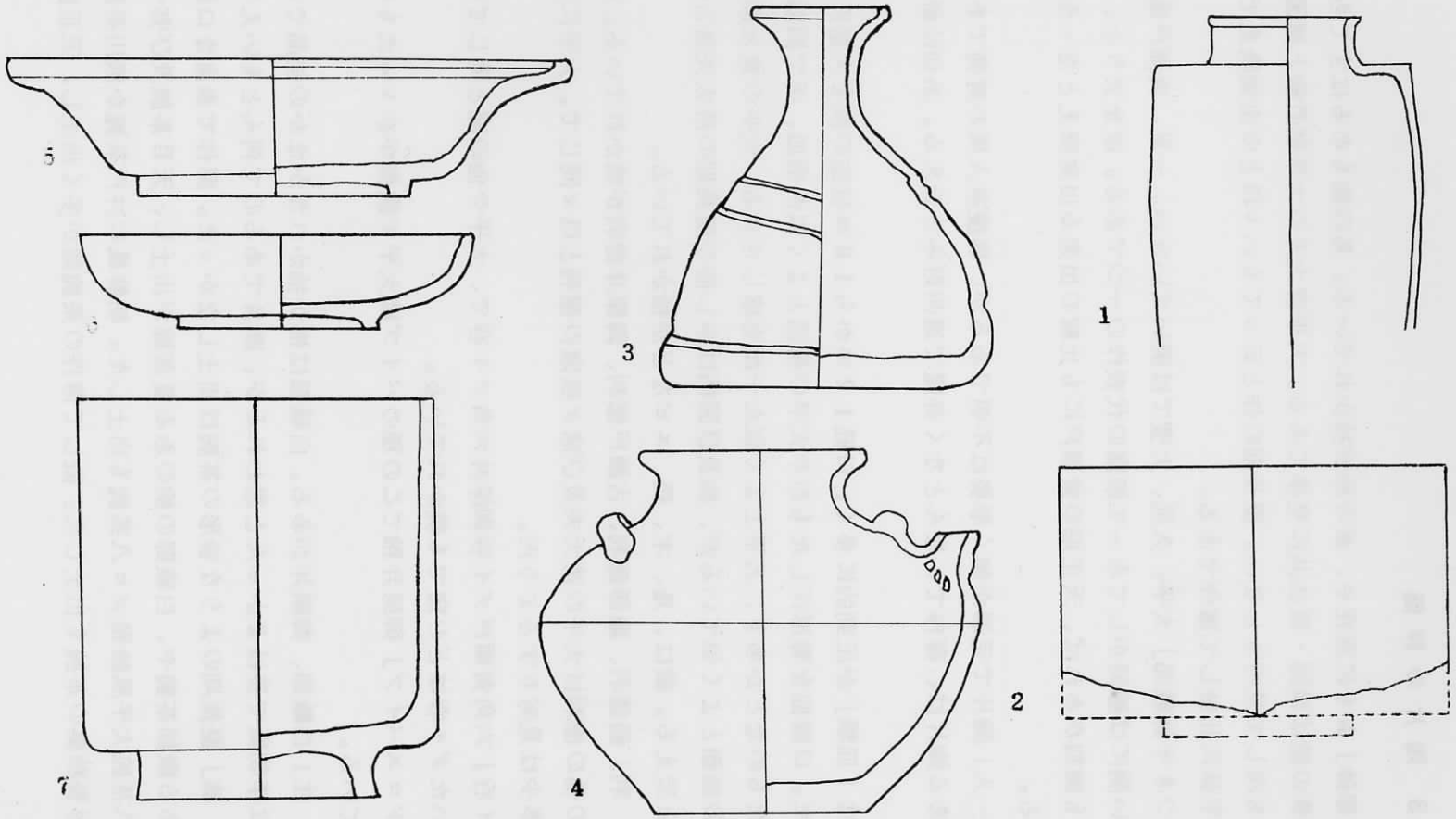
織部小皿　菊皿　黄瀬戸小皿



1. 黄瀬戸六角グイ呑　　2. 御深井六角グイ呑
3. マドロスパイプ断片　　4. 織部徳利
5. 御深井汁注断片（朝鮮青滋風）



1. 船徳利　　2. 御深井皿　　3. グイ呑
4. 古瀬戸徳利



1. 茶入断片古瀬戸釉　　2. 御深井六角向断片
3. 織部振出　　4. 御歯黒沸
5. 白織部小皿…絵は鳥が描かれている
6. 総　織　部　　7. 古瀬戸湯呑

3　陶片の評価

①　「織部鉢」おもに草花や、葦の絵が抽かれている。鳥の絵もあるはずである。草花や葦の絵は構図・筆法共に見事である。大平清太夫の大平鉢の絵と構図を比較しても決して見劣りしない。慶長期の作と云ってもいゝほどの出来映えである。作は大平鉢に比較して薄作である。

②　「高つき平鉢織部」大平、久尻、大萱では焼いていない。一見、黄瀬戸風の薄作で浅い胴には線刻がしてあって姫窯の代表作の一つである。欲を云うと、平鉢の中にも線刻があれば、天正期の黄瀬戸にも比較の出来る出来映えとなったと惜しまれる。

③　「茶　入」陶片で完器が無く形姿は不明であるが、春慶茶入風の肩衝であり、糸底のある陶片は、薄作で、なんとなく奇麗で遠州好みと云える。糸切は鮮かである。

④　姫窯は「皿類」が圧到的に多く、口径１２㎝から１８㎝位迄の皿を大量に焼いたようだ。口縁部を菊形にしたものや大平の菊皿とよく似た菊皿、手で四隅を折り曲げたものなどがあり、大平とよく似た一面を感じさせる。大平の寛永期の窯ケ坂窯の皿類とよく似ているが、絵及び図柄は少し前の慶長期の清太夫窯と同じであると云える。絵は、鳥、木、松、エビなどが抽かれている。

⑤　「徳　利」船徳利、織部徳利、古瀬戸徳利、御深井徳利が焼かれている。船徳利や其の他の徳利は大平の清大夫及び窯ケ坂窯の徳利とほゞ同じで、大平に比較すると多少は見劣りするようだ。

⑥　「グイ呑」六角黄瀬戸グイ呑御深井六角グイ呑で、大平や他の窯と同じである。口の開いたグイ呑はどの窯でも焼かれている。

⑦　「マドロスパイプ」御深井釉でこの種のパイプは大平で鉄釉がかゝったものが焼かれている。

⑧　「汁　注」白織部、御深井がある。白織部は梅が抽かれなかなかの佳品である。御深井は李朝風で姿はよかったと思われるが、断片であるので何んともいえない。

⑨　「茶　腕」慶長期のような沓形の茶腕は出土しなかった。薄作で素直な口縁部に段のある織部茶腕や、白織部の絵のある夏茶腕が出土し、天目茶腕及び弥七田風ゴロ八茶腕大平風飴釉ゴロ八茶腕も出土した。朝鮮風の井戸茶腕か熊川茶腕のような形姿釉薬の茶腕も出土した。概して薄作の茶腕類が多く出土し、天正慶長

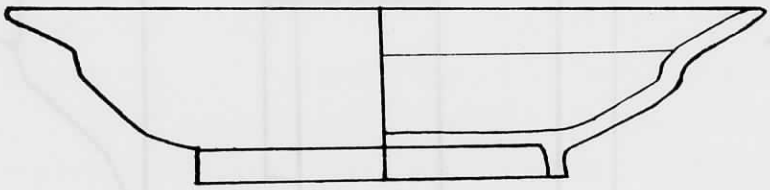
期の美濃独得の厚手で腰の張った志野や、沓形の織部に見る豪快さはない。しかしそれなりに趣もあり、豪快だけが茶人の好むところではなく、江戸初期美濃産の素直な茶腕も案外茶人から賞玩されたのではないかと思う。御深井の茶腕も出土したが作は良い。

⑩　「振　出」耳や絵のない織部の振出だが、形姿釉調もなかなかよい佳品である。

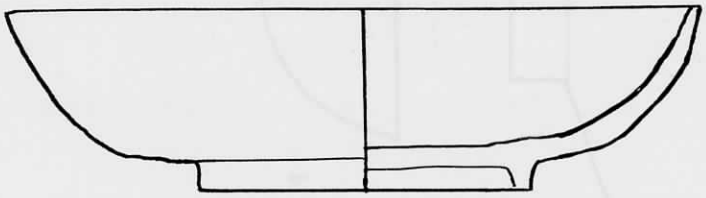
⑪　「足つき鉢」断片で全容は不明だが弥七田風の絵のある織部で、完器なら姫窯の代表作の一つになると思う。

⑫　「白織部瓦」薄作で断片であるが数奇屋に使用されたと思われる。岡田将監善同が姫の陣屋に葺いたと云う瓦かどうかは不明であるが、小名田窯ヶ根窯で出土した白織部瓦に比較すると、かなり薄作である。

1

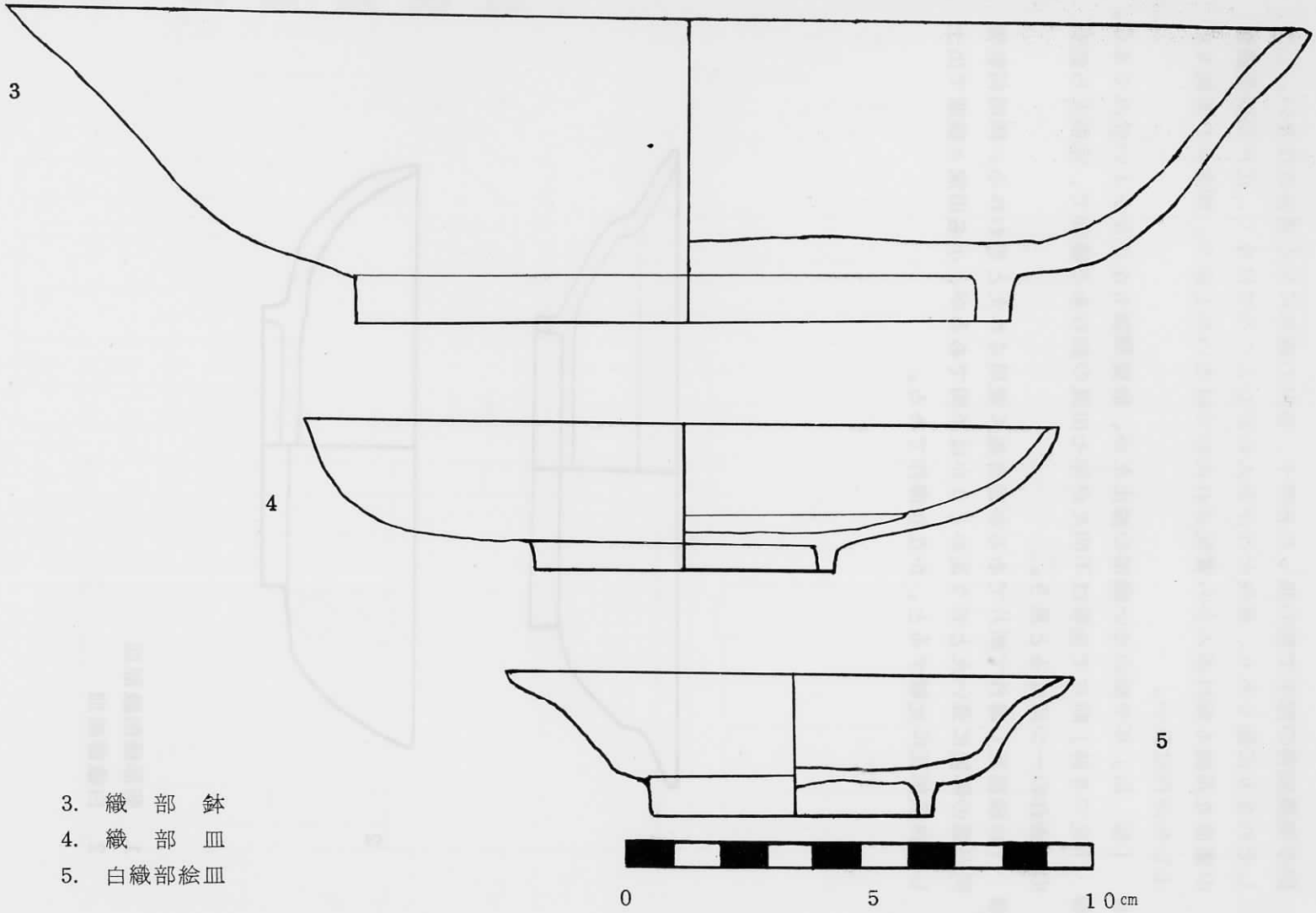


2

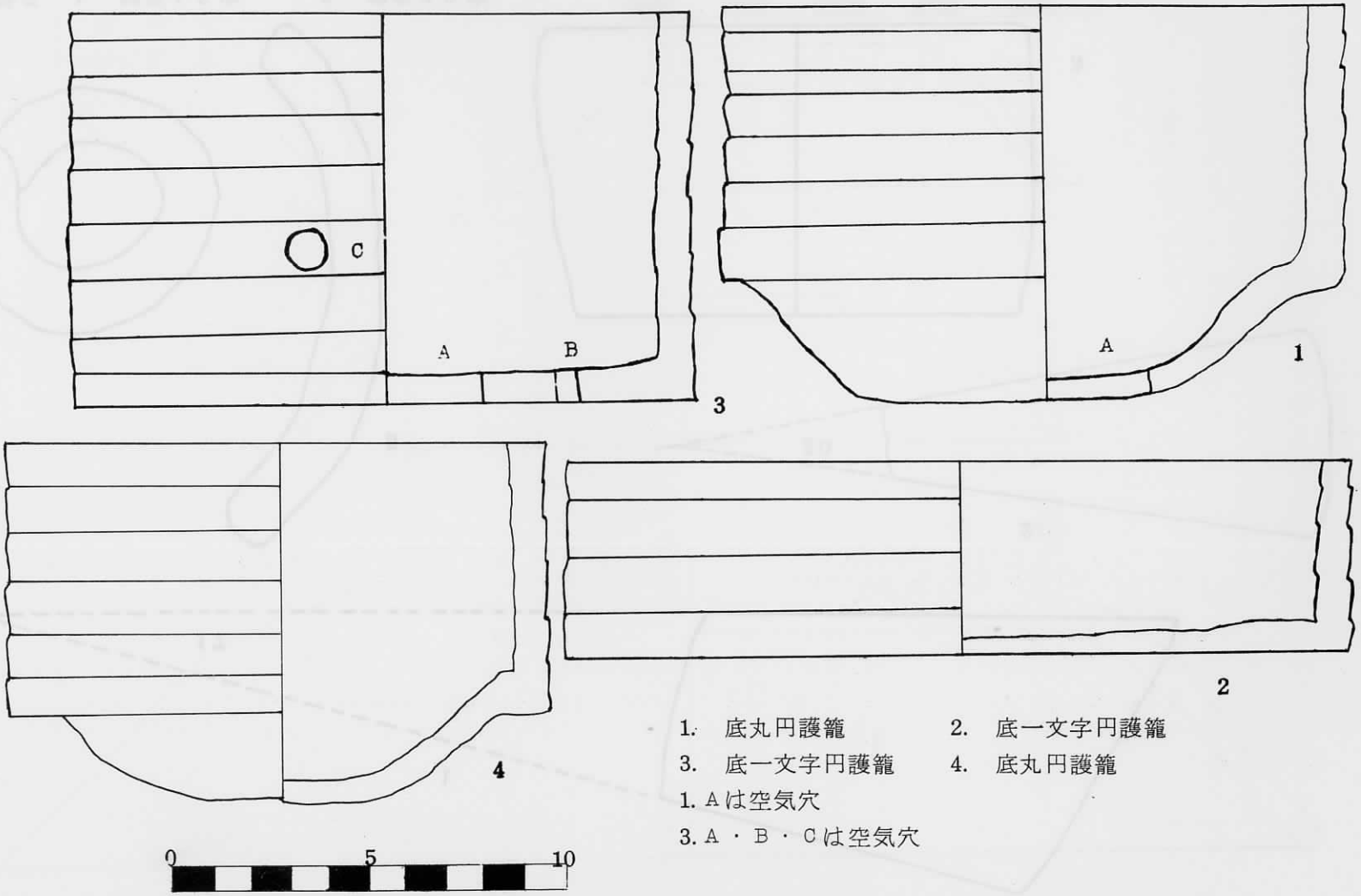


1.　菊形縁削織部皿

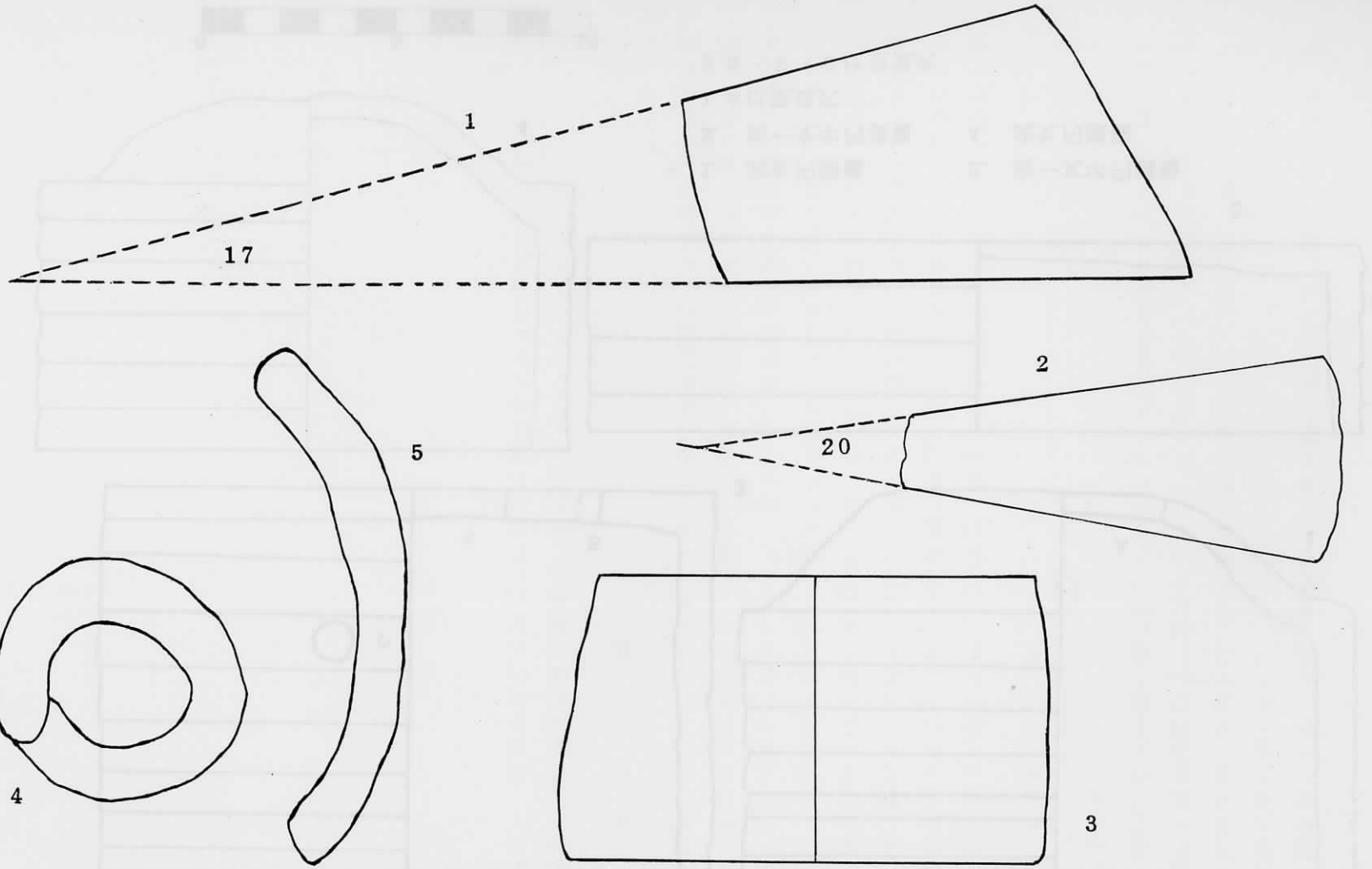
2.　白織部絵皿



3. 織　部　鉢
4. 織　部　皿
5. 白織部絵皿



1. 底丸円護籠　　2. 底一文字円護籠
3. 底一文字円護籠　　4. 底丸円護籠
1. Aは空気穴
3. A・B・Cは空気穴



駒爪　1.　傾斜１７度　　2.　傾斜２０度
　　3.　傾斜０度　　4.　輪トチ
　　5.　よ　り

⑬　「線香鉢」大平、久尻、尾呂などの寛永期の窯では、どの窯にも出土する。御深井釉も織部釉もある。

⑭　「御歯黒沸」歯黒とは、歯に鉄漿を施すを云い、上流社会の習慣であった。一般にも明治頃迄はその習慣があった。其の為に造られたつぼであろう。室町末期、桃山、江戸初期の窯では、どの窯でもほゞ同形のつぼが出土する。油つぼとも汁注とも云う。

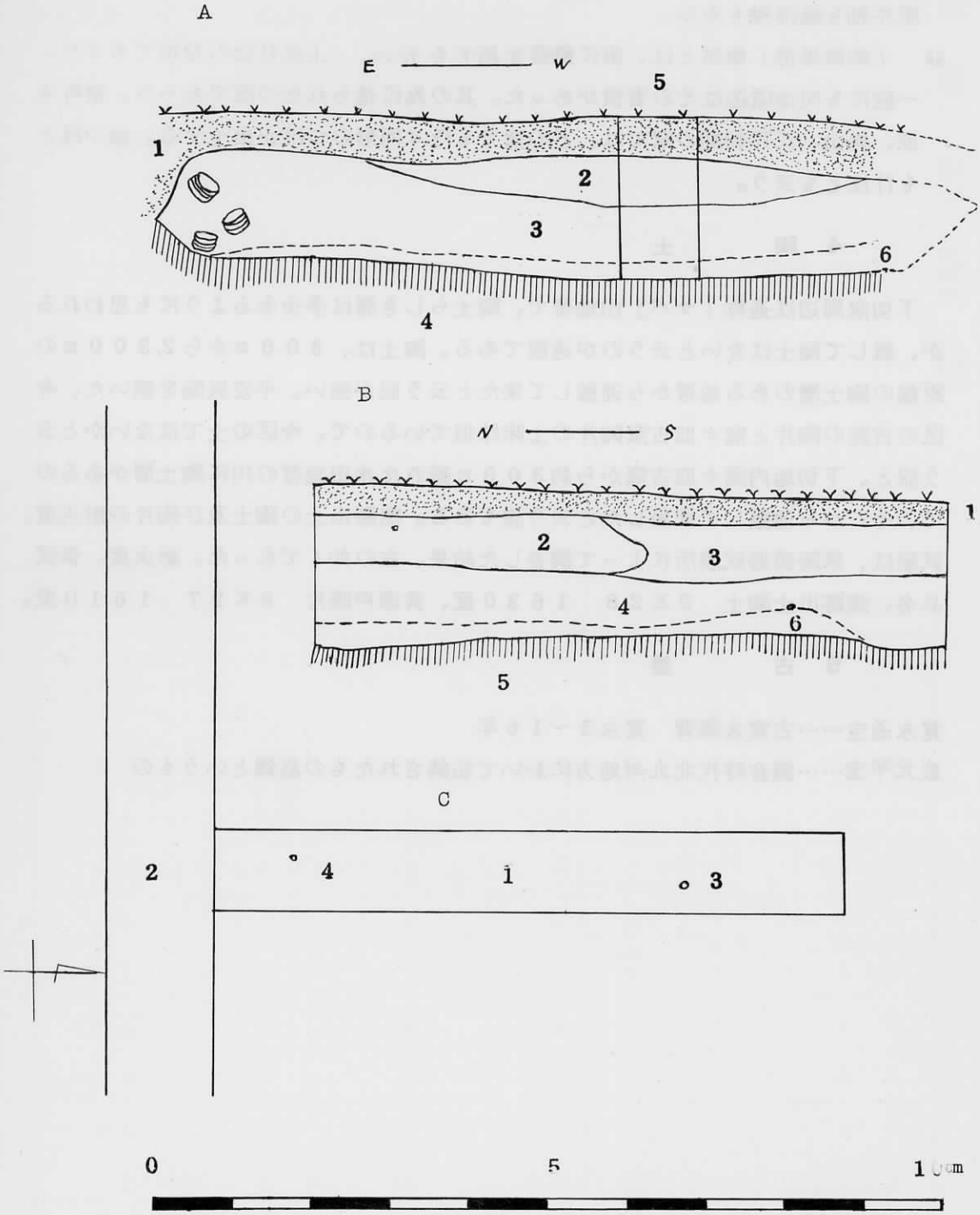
4　陶　　土

下切窯周辺は通称「サバ」山地帯で、陶土らしき層は多少あるようにも思われるが、概して陶土はないと云うのが通説である。陶土は、３００ｍから2,３００ｍの距離の陶土層のある地帯から運搬して来たと云う説が強い。平安灰陶を焼いた、今区の古窯の陶片と窯ヶ皿古窯陶片の土味は似ているので、今区の土ではないかと云う説と、下切地内窯ヶ皿古窯から約３００ｍ離れた水田地帯の川に陶土層があるので、そこから運搬して使用したと云う説もある。窯跡出土の陶土及び陶片の耐火度、試験は、県陶磁器試験所によって調査した結果、左の如くであった。耐火度、供試品名、窯跡出土陶土　ＳＫ２８　１６３０度、黄瀬戸陶片　ＳＫ２７　１６１０度。

5　古　　銭

寛永通宝……古寛永無背　寛永３～１６年

咸元平宝……鎌倉時代北九州地方において私鋳されたもの島銭というもの


A
E
W
5
1
2
3
6
4
B
N
S
1
2
3
4
6
5
C
2
4
1
3
0
5
10cm

A　ブルトーザーによる破壊断面

①　腐食土層（埋土）　②　焼土層　③　遺物層　④　黒黄土層

⑤　トレンチ　⑥　織部層

B　トレンチ断面

①　腐食土層　②　焼土層　③　赤褐色土層　④　遺物層

⑤　黒黄土層　⑥　織部層

C　トレンチ

①　トレンチ　②　ブルトーザー断面　③　寛永通宝発見地点

④　タイ元平宝発見地点

6. 下切窯ケ皿古窯遺物実測値

遺物番号	品名	口径	器高	高台径	高台高サ
A 1	鉢	28 cm	6 cm	14 cm	1 cm
B 1	皿	18.5	5	9.5	5
B 2	〃	17	2	8	0.2
B 3	〃	16	4	7	4
B 4	〃	16	3	6.5	0.5
B 5	〃	15	5	7.5	8
B 6	〃	14.6	3.2	8	3
B 7	〃	14.3	4	8	4.2
B 8	〃	13.5	3	6.5	0.5
B 9	〃	12.5	3	6	0.5
B 10	〃	12.2	3	6	1
B 11	〃	8.7	2	4.5	2

遺物番号	品名	口径	器高	高台径	高台高サ
C 1	茶腕	14.1 cm	6 cm	4.3 cm	1 cm
C 2	〃	13.7	7	4.3	1
C 3	〃	13.5	7	4.7	1
C 4	〃	13	5.6	4.3	0.9
C 5	〃	12	7	4.2	1
C 6	〃	11.5	7.3	4.3	1
C 7	〃	11.5	7	4	0.7
C 8	〃	11.5	6.5	4.9	0
D 1	高つき平鉢	13.5	6	9	2.9
D 2	高つき	12	5.7	8.2	5.8
E 1	グイ呑	8	6.4	2.5	6
E 2	〃	6.7	4.5	4.5	0.5
E 3	〃	6	4.5	4	4
F 1	湯呑	7.5	9.9	5.4	1
G 1	オハグロつぼ	5	8	4.7	
H 1	振出	7.5	9.9	5.4	1
I 1	徳利	6	23.5	64	8

7. 結　　び

姫窯の雑器類には慶長期の残影が色濃く残っていると云えるが、慶長期ではないように思えるのは、御深井釉の出土層から比較すると織部出土層は薄く、したがって、いくら時代を遡って考えても元和迄である。織部と御深井の接点から出土した寛永通宝から推察しても元和元禄期の窯とするのが妥当であると想う。茶陶類の出土品を見ても概して薄作端正であり、天正慶長期の豪快さはない。雑器類も変形の物は少く、ロクロびきの皿類が多いが、元和元禄期の美濃窯の特徴の一つで、わずかの例外は弥七田窯及久尻勝負窯だけである。しかし姫窯の作は江戸初期の窯としては上手に属する窯といえよう。

今回の調査では登窯の発見は出来なかったが、今後の研究課題である。しかし、今回の試掘によってその遺物の内容が知られたことは大きな成果であった。